

# 物について伝えたい

「杜の都」仙台にある、東北最大の動物園「仙台市八木山動物公園」。地元の人々から愛されているこの場所を拠点に、宮城教育大学と協働でアフリカの島国マダガスカルにある「チンバザザ動植物公園」と交流が始まった。

【宮城県】

仙台市

## 宮城県仙台市

面積788.09平方キロ、人口約103万4,000人。1601年伊達政宗によって城下町として開かれ、町中に緑が多いことから「杜の都」と呼ばれる。東北地方における経済、行政の中核都市として発展。アメリカ・リバーサイド市、中国・長春市など複数の都市と国際姉妹・友好都市協定を結んでいるほか、仙台市八木山動物公園と宮城教育大学が実施するマダガスカルとの交流など、国際交流・協力にも熱心に取り組んでいる。

## 「アイアイ」を知らないマダガスカルの子どもたち

「ほら、大きいゾウさんがいるよ！」5月中旬、冷たい雨がしとしと降り注ぐ宮城県仙台市。ビジネスマンや学生が行き交うにぎやかな駅前から郊外に向かう。行き先は「仙台市八木山動物公園」。東北出身の人なら、幼いころに一度は訪れたことがあるかもしれない。

残念ながらこの日は雨。にもかかわらず、駐車場には数台のマイクロバスが停まっていた。園内に入ると、雨の中、元気に駆け回る小さな子どもたちの姿が。アフリカゾウ、キリン、ニホンザル、ゴリラなど、初めて目にする大きな動物に目を輝かせている。「こうやって、子どもたちの楽しそうな顔を見るのが好きなんです」

そう話すのは、八木山動物公園に勤務する田中ちひろさん。園内にあるビジターセンターの展示やイベントの企画、学校の社会科見学などを担当する彼女は、「二つの空間で、世界の動物について知ることができる動物園は、『環境教育』の場としても大切なんです」と言い切る。

田中さんがこのことに気付いたのは、青年海外協力隊として、マダガスカルにチンバザザ動植物公園で活動していたとき。アイアイやキツネザル、カメレオンなど多くの固有種が生息するこの国。しかし近年、都市化が進む首都アンタナナリボなどでは、このよ



レッサーパンダを例に、動物の展示法や管理法を担当飼育員の三浦史順さんから学ぶマダガスカルの研修員。日本の動物園の設備や職員の技能の豊富さに驚きを見せていた

# 地域の貴重な動植



「環境スクール マダガスカルを遊ぼう!」と題し、仙台市内でイベントを実施。マダガスカルの自然や文化についてのパネルや体験型教材の展示やシンポジウムなどが行われ、子どもから大人まで、多くの市民が参加した

八木山動物公園のビジターセンターにはマダガスカルの紹介コーナーが設けられている。田中さん(写真)が自ら説明することも

うな生物と接する機会が失われつつあった。「チンバザザには、マダガスカルの貴重な動植物が集まっています。でも、町中に行くと『アイアイって何?』という人がほとんど。地元の人に、知る機会を提供し、自国の生物をどのよう守っていくか、みんなで考えることが大切だと思いました」

そして2008年、縁あって、チンバザザ動植物公園と八木山動物公園が技術協力協定を締結。現地の事情にも詳しい田中さんに白羽の矢が立ち、帰国後は八木山動物公園の職員として支援に携わることになった。さらに、もう一つのアクターとして名前が挙がったのが、市内にある宮城教育大学。八木山動物公園のノウハウに加え、環境教育実践研究センターを構え、地元の教育委員会や自治体と連携しながら、地域ぐるみの環境教育をリードしている同大学のアブローチは、まさにチンバザザ動植物公園が必要としていたも

のだからだ。そして現在、JICAの草の根技術協力事業を通じて、八木山動物公園と宮城教育大学、それぞれの強みを生かしながら、マダガスカルの環境教育のための人材育成に取り組んでいる。

## 環境教育を通じて世界を思いやる心をはぐくむ

まずは日本の動物園の取り組みを肌で感じてもらうため、チンバザザ動植物公園の職員が来日。八木山動物公園では野生動物の飼育方法や教育活動について学び、宮城教育大学では齊藤千映美教授から教育手法や環境教育などの講義を受けた。

さらに、齊藤先生は大学の学生たちと一緒に、環境教育の教材として紙芝居を作成。紙芝居は、動植物が置かれている状況について、子どもたちの五感に訴えながら、現状を分かりやすく伝えるのに最適なツールだからだ。齊藤先生の指導を受けながら、研修員と学生がストーリーを考えて絵を付けた「アイアイのおはなし」は、早速、現場でも活用されている。

さらに、日本からも専門家がマダガスカルを訪問。環境教育のモニターリングに加え、野生動物の飼育や治療に関する技術指導も行う。「環境教育だけでなく、動物園の総合的な能力強化に貢献できればと考えています」(田中さん)。

「マダガスカルへの協力を通じて学

んだことを、仙台の人々に還元していくのも私たちの役割」と齊藤先生は強調する。日本での研修に学生を巻き込んだのも、そういった考えからだ。また、研修員が環境教育を実践する場として、市内のみどりの森幼稚園や県内の小学校を選択。日本の子どもたちを相手に、マダガスカルの自然や生物の紹介、紙芝居の実演を行っている。表現力豊かな彼らのパフォーマンスは大好評で、「言葉は通じなくても、いつの間にか仲良くなっています。日本の子どもたちにとっても、世界を感じるきっかけになれば」と期待する。

現在、田中さんと齊藤先生は、県内の教員と協力して、マダガスカル向けに環境教育の体験型の教材を開発中。アイアイの習性について体験して学べる木、カメレオンの舌の長さを体感できるバナナなどが、すでに試作品として八木山動物公園に展示されている。今後は、現地の意見を取り入れながら、より効果的に実践できるものに改良していく。「将来的には、チンバザザ動植物公園を拠点に環境教育が全国に広まり、マダガスカル全土の自然保全の取り組みにつながってほしい」。仙台の人たちはそう強く願っている。

「動物に対する接し方など、チンバザザの職員から学ぶこともたくさんあるんです」と田中さん。動物園を通じて生まれたつながりは、「杜の都」仙台にとっても、自然や生物の原点に立ち返るきっかけになっているのだ。



日本で作成した紙芝居を、マダガスカルの子どもたちに披露する